

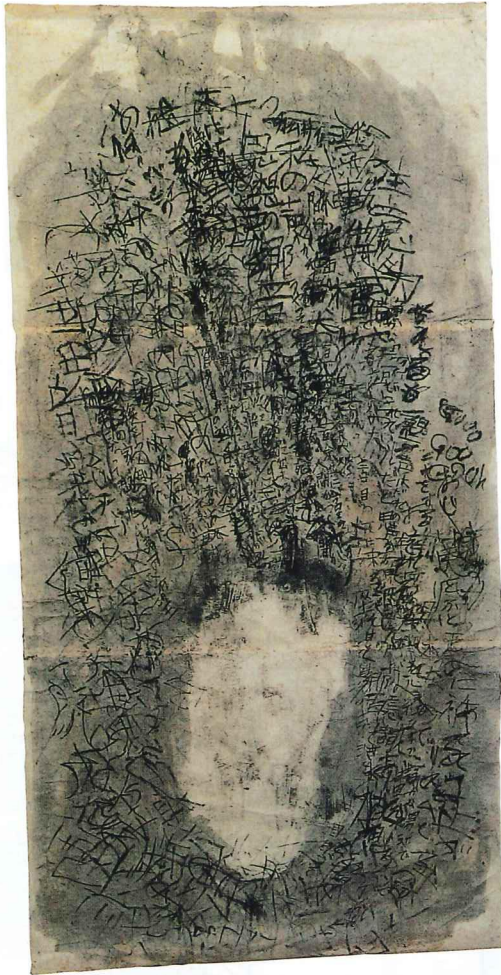
イケてる PEOPLE

あふれでる 言葉を等身大に表現 絵を描いて10年目

内藤絹子さん
(和田山町)



祈りの言葉



若手芸術家の登竜門として知られる

「現代美術の展望VOCA展2000」

(上野の森美術館創設)で、大賞につぐ

奨励賞を受賞した内藤絹子さんは、5

年前に和田山町へ引越してきました。

大阪府生まれの内藤さんは、京都精華

大学美術学部で版画を専攻、大学院を

卒業後、1996年指導を受けている

長岡国人教授がアトリエとして利用し

ていた古い民家に引越し、働きながら

創作活動を続けています。

「大学を卒業しても創作を続けたい。

けれど、消費の多い都会で広いアトリ

エを持ち、絵を描く生活は経済的に無

理。どうにかしなきゃと

いうせつばつまった思い

で、ここしかない!と和

田山町へ来ました。ここ

へ来たときは、今までと

はまず時間の流れがぜ

んぜん違うと思いまし

た。あのころは、草取り

もできなかったんです

よ。草を抜いたら『痛

い!』と声が聞こえてき

そうでとても自然に敏

感だったんです」と当時を振り返る内

藤さん。今では、畑に野菜をつくって食

べているというから驚きです。「土をさわる生活は好きです。土いじりをしていると、いろいろな考えが浮か

んでくるんです。そういう距離感が文

化につながってきたんじゃないかと思

います。創作活動をしている仲間から、

ここでの生活スタイルがあっているんじ

ゃないと言われました。きっと、作品に

も何か現れているんじゃないかな」

内藤さんの作品は、心の中からあふ

れてくる言葉を書き連ねた独特なモノ

クロの世界。

「はじめは日記みたいなものから始ま

って、誰が書いたのかわからないけれ

ど、生き様が伝わってくる街の落書き

のようなものに興味を持ちました。そ

んな感じであふれ出す言葉を描いてい

ます。日常生活の中から生まれる言葉

を等身大に表現しています」

毎年、数回は個展を開いてきました

が、今年初めて但馬(山東町ヒメハナ

公園)で個展を開きました。

「最近解体する民家などで、廃材を

もらって帰ってきて作品をつくっていま

す。使い捨ての現代、人々とともに暮

らしてきたものは、はかなく私に語り

かけます。ひとりでは限られたことが

ありますが、みんな一緒に何かやって

みたいなのも思います」

来年、この民家の近くに長岡教授の

アトリエ兼工房設計画があるとか。

「交流や教育を通して、ここでは何か生まれる場になりたいですね」と内藤さんの夢が広がります。

毎日の暮らしを彩る
「たんぎんマイライフ通帳」
「たんぎんバンクカード」はいかがですか?

たんぎんバンクカードは
デビットカードとしてもご利用いただけます。

地域社会の発展に奉仕する
但馬銀行
本店 豊岡市千代田町1番5号
たんぎんホームページアドレス
<http://www.tajimabank.co.jp/>

まいそう祭り
1月14日(月)
大屋町宮本御井神社
午後7時から神事

まゐり 伝説

愛嬌のある鬼の面をつけた男たちの持つ木箱を、氏子たちがたいまつでたたいて無病息災を祈願する摩訶不思議な祭り「まいそう祭り」



新年が明けて小正月の前、1月14日の夜、大屋町宮本御井神社の境内には、氏子をはじめ見学のの人々が各地から集まり、「まいそう祭り」が始まるのを待っている。

本殿で神事のあと、神主の御神火から点火されたたいまつを手に持ち、円陣を組む。鬼役を演じるのは厄年の男性3人。太鼓の合図にあわせて、右手に木箱、左手に木鉾(ぼこ)を持った一番鬼が拝殿から飛び出し、炎々と燃えさかるたいまつを頭上で振りかざしながら、時計と逆回りに円陣をまわ

る。氏子たちは、「まいそう祭り」の語源である「マイイソナイ」(もう一艘ない)とはやし立て、木箱に激しくたいまつをたたきつける。火花が散っているようすは壮絶。しかし、なぜか火傷やケガをした人はいない。二番鬼、三番鬼の順で続き、円陣を三周したあと、ほえ声をあげて本殿にそれぞれ消える。

古くから、この神社の氏子たちで受け継がれてきた祭りである。伝説によると、この地が泥海であったころ、神が3艘の船に乗って通過中、2艘の行方がわからなくなった。1艘は大屋町の隣、養父町建屋(たけや)の船谷(ふねたに)で見つかったとされ、「アッター、アッター」と舞う「御船祭」または「笑祭」と呼ぶ祭りがあった。しかし、今は途絶え、資料の中にしが残っていない。あと1艘がどうしても見つからないので、「マイイソナイ」(もう一艘ない)と呼びかけながら、夜を徹して捜したのが「まいそう祭り」である。

また、御井神社では11月23日に「萩立祭」がおこなわれる。氏子たちが萩の木を持ち寄り、神社で燃やす祭

りだが、「まいそう祭り」で船を捜してぬれた衣裳を、この「萩立祭」で乾かしたと言ひ伝えられている。この木は冬の季節しめつけていても、火が付きやすいという理由によるといふ。

何年も使っていたので破損がひどくなり、現在の鬼の面は10年ほど前に新しくした。材質は以前と同じ桜の木を使い、できるだけ近い顔になるようにつくった。目と鼻が大きく愛嬌があり、角のはえた赤鬼・青鬼とはまったく違った表情をしている。

神の依代(よりしろ)の木箱に神聖な火で触れることで、願いがかなうとされる不思議な「まいそう祭り」。このあたり一帯がまだ海だったころの遠い昔の言い伝え。祭りが終わり、たいまつを持った人々が御井神社からくねくねとした坂道を下り帰っていくようすは、点々と火がちらりなり幻想的で美しい風景が広がる。太古のいにしえが今によみがえるようだ。

協力・大屋町教育委員会



まいそう祭りがおこなわれる御井神社。木立の中、静かにたたずんでいる。1月14日/まいそう祭り、5月3日/春の大祭、10月1日/秋の大祭、11月23日/萩立祭と年4回もの祭りがある。

お酒は20歳になってから

生配造り
香住鶴 吟醸純米酒
720ml 1.8/

生配造り
香住鶴 吟醸純米酒
720ml 1.8/

新世紀に伝える技と味、そして心

生配(きもと)造りとは…
日本酒の伝統的な配(もと)造り方法で、こうじ菌・硝酸還元菌・乳酸菌・酵母菌等の微生物の働きを自然の摂理の中で巧みに利用し、永い日数と手間をかけ優良な清酒酵母を純粹に、強健に育てる造りです。また、酸化防止性がある為、品質の安定性に優れています。

生配造り吟醸純米酒

飲むほどに歴史のロマンがひろがります。

バランスの良い味は
厳寒の季節に蔵人たちが
但馬杜氏の伝統の技で
心をこめて育て上げた
生配造り吟醸純米酒です。
ふっくらとした
バランスの良い味は

より自然に、
より伝統的に

当社の永年の生配系酒母
(山麴)の研究により
本格的な生配造りの
誕生となりました。

厳寒の季節に蔵人たちが
但馬杜氏の伝統の技で
心をこめて育て上げた
生配造り吟醸純米酒です。

もとす 配造り(山卸し)

香住酒造有限会社 〒669-6545 兵庫県城崎郡香住町森646-1 <http://www.fukuchiya.co.jp>